

## シンポジウム「三遠南信—愛知・静岡・長野の越県連携を支える出版文化」

三遠南信という概念がある。三河（愛知県東部）・遠江（静岡県西部）と南信（長野県南部）が、県境を越えて、政治的・経済的・文化的に連携交流するもので、日本の越境連携のモデルケースとして注目を集めている。この一帯はもともと天竜川や豊川の水系であり、それが共通の風土や文化をもたらしてきた。

三遠南信の連携を束ねる組織として、浜松市役所内に SENA（三遠南信地域連携ビジョン推進会議）が設置され、10 年前から活動を継続している。この SENA には現時点で、東三河の 5 市 2 町 1 村、遠州の 8 市 1 町、南信州（下伊那＋上伊那）の 3 市 6 町 13 村、計 39 の自治体と、付随する商工会・商工会議所などが加盟して、共通する課題の解決に向けて協力している。

県境を超えた連携が実を結ぶには、行政や財界の働きに負う部分もあるが、視野を広げ、県境を越えた発想をすることがいかに豊かな実りをもたらすかが、この 3 地域の住民はもちろん、広く実感できることがまず必要であろう。そこで今回、三遠南信を幅広く展望し、その魅力を人々に伝える出版言論活動を担ってきた、民間における活動に注目してみた。

沢田猛さん（本学出身）は、「毎日新聞」静岡支局時代、遠州と信州との接点に位置する青崩峠、塩の道、飯田線建設の功労者 アイヌの川村カネト、久根鉦山のじん肺問題などを中心に、この三遠南信のテーマを先駆的に取り上げてきた。

三河では、「東三河&西遠・西三河・南信応援誌」と銘打たれた季刊雑誌『そう（叢）』がすでに 59 号を数え、三遠南信を扱った「はるなつあきふゆ叢書」が 28 冊と若干の自費出版も含め計約 60 冊が出版されている。

遠州では、あいにく現在は休刊だが、三遠南信に特化した雑誌『Ami（アミ）』が 17 号まで出版され、貴重な経験を積んでいる。

南信州では編集プロダクション「みらい企画律」が、三遠南信を大事なテーマの一つとして、出版活動や食文化のイベントなどを展開している。

当日は、こうした活動に携わってきた当事者の方々をお招きし、シンポジウムを開くことで、出版言論分野における三遠南信という地域連携の可能性や課題等を、具体的に考察する場としたい。

なお、法政大学国際文化学部は 2012 年度以降、南信州で学生研修を実施しており、上記した雑誌『そう（叢）』と『Ami（アミ）』は、学部資料室の「飯田・下伊那文庫」に全冊揃っている。昨年夏、研修担当の高柳俊男が、SENA の新 10 年ビジョン策定委員に「南信州学識者代表」として任命された。今回のイベントは、そのことを契機に企画・実施するものである。



- 日時：2018 年 7 月 7 日（土） 14:30～17:30（予定）
- 会場：法政大学 市ヶ谷キャンパス（各線の市ヶ谷駅もしくは飯田橋駅から徒歩約 10 分）  
ポアソナードタワー3階 BT0300
- 内容：「三遠南信—愛知・静岡・長野の越県連携を支える出版文化」をめぐるシンポジウム  
＜登壇者（敬称略）＞
  - \* 沢田猛（全体／元毎日新聞編集委員、現中央大法学部兼任講師、本学社会学部卒）  
「静岡・長野・愛知の県境域を歩き回っていたあの頃」
  - \* 味岡伸太郎（三河／春夏秋冬叢書代表・編集長）「ある地方出版社の存在理由」
  - \* 水島加寿代（遠江／雑誌『三遠南信アミ』取材・編集員）  
「三遠南信アミ：雑誌創刊メンバーの想い」
  - \* 矢澤律子（南信／みらい企画律）「『三遠南信ここが楽しい事典シリーズ』を出版して」
- 参加無料、事前申し込み不要（連絡先=国際文化学部事務、03-3264-9345）